
となりのみいちゃん

石室悠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

となりのみいちゃん

【Nコード】

N0662C

【作者名】

石室悠

【あらすじ】

ふうちゃんこと木村風華は、しがない女子高生。特に夢も希望も無く、のんびんだらりと生きていた風華は、ある日「彼女」である「みいちゃん」を『異次元ライン』に連れ去られてしまう。風華は「みいちゃん」を助け出そうと、『異次元ライン』に入ろうとするが……

目が覚めたら、まだ朝の六時だった。夏休みだったのに、珍しい。まあいつか、久しぶりにラジオ体操でも、やっちゃおうかな。

いつになくスッキリ目が覚めたせいかな、なんとなく機嫌が良かった。布団から出ると、ターコイズのTシャツとジーンズに着替えて、窓を開ける。

外はいい天気だ。まあこうやって窓を開けていられるのも、朝のうちだけ。すぐに悲鳴を上げながらエアコンに縋り付くわけだけでなく、着替えたのはいいけど、高校生にもなって小学生と一緒にラジオ体操なんてね、と思い直した。部屋のラジオを合わせたけど、まだ時間があるからと思って、布団に横になる。

「今日の天気は曇りのち晴れ、所により雨でしょう。異次元確率は〇%——」

とかいう淡々としたニュースを聞いていたら、起きてたつもりだったのに、いつの間にか時計の針は八時を指してた。

もういいや。あたしは諦めてラジオを切ると、もう一度寝る事にした。

だんだん蒸し暑くなってきた、眠りが浅くなる。いつも通り、郵便屋さんのバイクの音が聞こえた。ああ、もう一〇時半なのかあ、と思うけど、起きる気はしない。

ブロー、と燃費の悪そうな音を立てるバイクは、うちの前で止まる。ポストにガタンと何かを押し込む音。

そして、

ぶおあーん

って感じの、止まりかけのトラックみたいな音がした。少し眼を開けて、窓を見る。郵便屋さんの音は消えていた。

あーあ。また予報外れちゃったね。

よりにもよって、まーた『異次元ライン』に人、持ってかれちゃったじゃん。

あたしは大あくびをして、足の指で扇風機をつけると、また寝た。

あたしの名前は木村風華。通称ふうちゃん。極普通の、のんべんだらりな女子高生って奴。

あたしの事はどうでもいいよね。

さっきの奴。『異次元ライン』って物が確認されたのは、一〇年ぐらい前。

山がいきなり線状にハゲたのが始まりだったかな？

当時はUFOの仕業とか、イタズラとか色んな説が出たんだけど。その内、頻繁になって、人前でも起こるようになった。

見た人の話は大体、「いきなり黒いトンネルみたいな物が五〇mほど出来て、すぐ消える。後には、何も残らない」って感じ。

地面は抉られて、トンネルの中に入ってしまった人は、消えてしまう。そして一人も帰って来てない。

皆はこれを『異次元ライン』と名付けて、大騒ぎした。

でも、長続きはしなかった。

ニュースになって一週間は盛り上がって、「うちにも来たら」みたいな感じだったけど。人間って強いよね。「そんな時はそんな時」になっちゃった。

だから今や『異次元ライン』に関心があるのは、家族が巻き込まれた人と、政府関係者と、学者と、あと一部のヲタクだけ。

あたしにとっても『異次元ライン』はもう日常の事だから、正直「郵便屋さん運悪うー」ぐらいしか感じなかった。

ふと気付くと、外が騒がしい。

眼を擦りながら窓から見ると、警察が山ほど来ていた。

いわゆる、『異次元ライン』調査隊。何だかんだ、こんなのが国会議事堂とかで起こったら大変だから、調査は続いてるわけ。

今までの調査で判ってるのは、『異次元ライン』が通った後に放射能とか、危険な物は残らない事と、二度と同じ場所は通らないって事。だから安心して調査出来る。お金の無駄遣いもたくさんしてて、最近問題になってるんだって。

しょせんどんな環境でも、日本人ってこーなのよねー。自分に関係無いと、本気にならないっていう感じ。

同じ穴のムジナな自分を感じつつ下を見ると、携帯にメールが入った。着信音は今人気急上昇の、みやびちゃんの新曲。みいちゃんからだ。

すぐにメールを開いて見ると「まだ？」とだけ。

で、あたしは今日、みいちゃんとデートだったのを思い出した。

大急ぎでTシャツをキャミソールに替えて、夏カーデを羽織る。玄関は警察でいっぱいだったから、サンダルを取ると、勝手口から家を出た。

みいちゃんとは街で映画を見る約束をしていた。今日は平日だし、レディースデーだから。

駅前の公園まで行くと、みいちゃんは噴水の側に座って待っていた。

「ふうちゃん、遅いー」

可愛いキャミソールと白いふわふわのスカートにサンダル。みいちゃんはちよっと少女趣味。でもみいちゃんはそれをしても殴られない程度に可愛い。犬で言ったら、なんかチワワみたいな。そう、眼が大きくて、笑うとみいちゃん自身がフリルみたいな感じがする。あたし国語とか苦手だから上手く言えないけど、みいちゃんはあるに可愛い。でもみいちゃんと一緒に仕事すると、きつととんで

もなくムカつくと思う。天然って、そういう人種。

「ごめん、みいちゃん」

「もう映画始まってるよ、ふうちゃん」

「じゃあ、ちよつと喫茶でも行こうか」

次の上映時間まで一時間。あたし達は喫茶店で時間を潰す事にした。

みいちゃん、っていうのはもちろん仇名。でも本名は忘れてしまった。

みいちゃんは、あたしの彼女だ。

彼女と言っても、あたしだって真性れづとかゆーわけじゃない。

「世の中、ロクな男居ないし、私達は女同士、仲良くやっちゃいますもんね」という感じ。要するに、モテない女学生の代償行為ってゆー奴かな。

あたし達は、女友達の中から、自分の彼女を選ぶ。基本的に類友のモテない娘ばかりだから、成立しない事はまず無い。

それで、あたしはみいちゃんに「彼女にしてくれ」と頼まれた。

みいちゃんは、天然だ。「あのね、みいちゃんね、昨日お手伝いで、畑の草むしりしてたら、野菜も全部無くなっちゃってね、怒られたの」ぐらいのヤバさは平気でお披露目する。少し頭が弱いんじゃないかと思う。

でもみいちゃんは、自分の事を「みいちゃん」とか言っても、蹴られない程度には可愛い。昔流行った、オヤジキラー的存在っていうか。

その天然さ加減が、あたし達の「ついててやらなきゃなア」みたいな保護者の心理を揺さぶるから、どうしようもないのだ。

まあ夢も希望も無い世代のあたしらだから。喫茶に入って暇つぶ

しともなれば、会話なんて、昨日のドラマの内容とか、ウチの弟の馬鹿話とか、くだらないモンなわけで。

だから今朝の事件も、くだらないモンの一部だったんだと思う。

「そーいや、あたし今日、『線』見たよ、『線』」

『線』っていうのは、『異次元ライン』の略称。

「え、本当？ いいなあー、私も見たかったなあー」

「面白いモンじゃないよ。まああたしも、直接見たわけじゃなくて、うちの前に出たみたい。郵便屋さん、巻き込まれちゃった」

「うわー、大変だねー」

みいちゃんはいつもの顔で、のんびり感想を言った。

「……本当に、大変だと思ってる？ みいちゃん……」

「思ってるよお、ふうちゃん。心外だなあー」

相変わらず、何処まで本気で言ってるのか良く判らない、みいちゃんだった。

映画は無事見れた。まあどこにでもある、ありきたりな恋愛物。

彼女の方が病気で死んじゃう、みたいな。こうやってヒロイン気分を共有するのよね、ヲトメってのは。

そう冷めたフリをして見たけど、そこそこ面白かった。みいちゃんなんか泣いてるだろうな、と思ったけど、意外な事に彼女は「あんまり面白くなかったね」と言ってきた。

映画の後は本屋に行つて、漫画を数冊買うと、みいちゃんとは別れた。

家に帰るなり、お母さんが「大騒ぎだったのに、何処に行つてたの」と文句を言う。

そりゃあ『線』が出たのは大事件かも知れないけど。事件一つに映画の予定はずらせないし。

例えテロが起こっても、ドタキャンだけはしちゃいけないのが、女学生という難しい時期なのだ。

お母さんはまだ何か言ってたけど、面倒なのでさっさと部屋に戻った。

携帯を見ると「また遊ぼうね」とみいちゃんからメール。「うん」と素っ気無く返すと、さっさと寝る事にした。

二、三日、みいちゃんと連絡が取れなかった。

みいちゃんは「うさは寂しいと死んじゃうんだよ？」ぐらいの言い訳をしながら、平然とメールをしまくるような寂しがり。連絡が途切れる事は、あんまり無い。

だから少し心配だったけど、まあそんな事もあるかもね、と思いながら過ごした。

でも四日目の朝、流石に心配になった。

ちょうど、今日は柳沢さんとゲームセンターに行く予定だったので、ついでに聞いてみる事にしようと思う。四日目ともなると、警察も居なくなつて、私はいつも通り玄関から遊びに出た。

待ち合わせの時間に一時間遅刻したけど、柳沢さんもまだ来てなかった。一〇分後に来た彼女と、適当に喋りながらゲームセンターに行った。

柳沢さんはいわゆるヲタクさんだ。今日も平然とダサイTシャツにヨレたジーンズで、なんか男っぽいサンダルに分厚い眼鏡。お世辞にも、眼鏡を取ったくらいじゃ美少女にはなれない。

でも柳沢さんはそこそこノリのいいヲタクさんで、あたしも宿題を押し付ける代わりに、彼女のオタッキーな話題を楽しく聞き流してあげる仲だ。面白いゲームがあるから紹介したいと言うので、判

ったとは言ったけど、ゲームにはあんまり興味が無い。
でもそんな提案をしてくるって事は、柳沢さんの方はあたしを友達だと思っているに違いない。少し複雑な気分だった。

柳沢さんが「面白い」というゲームを始めて、しばらく経った。UFOキャッチャーも一通り見て、暇を持て余していたら、ふと、みいちゃんの方が、柳沢さんとは仲がいい事を思い出した。確か、幼馴染だったとかで。

「そういや、柳沢さん」
「何？」

ゲームに熱中してる柳沢さんに尋ねる。彼女は少し不愉快そうに顔を顰めた。

「みいちゃん知らない？ 最近、メール来ないんだ」
すると柳沢さんはしばらく黙って、そのうちゲームに負けると、小さく答えた。

「みいちゃん、『線』に入っちゃったって」
「え」

一瞬意味が判らなくて、しばらく固まった。

「塾に行く途中で、自転車ごと。あと近所の野良猫ごと」

柳沢さんはそう言いながら、両替機の方に行ってしまった。

みいちゃんが？ 『線』に？ 入っちゃった？ という事は？

みいちゃんが、居なくなっちゃった！

あたしは大いに焦った。

「や、柳沢さん！ どうして友達が行っちゃったのに、そんな冷めてるの！」

柳沢さんに突っかかると、彼女はボソボソと呟いた。

「冷めてるって言うか。もう四日も経ったから、自分は心の整理がついて」

「心の整理って。幼馴染なんですよ、もっと、こう、悲しんだりしないの？」

「悲しんだって、居ないものは居ないし、泣いたって、帰って来ないし」

柳沢さんは私のほうを見て言った。

「木村さんだって、本当にみいちゃんが居なくなって困ってるか、怪しいよ」

「どういう意味よ」

柳沢さんは答えもせず、またゲームを始めてしまった。

柳沢さんの言う事には、一理ある。

あの後、怒ってあたしは一方的に「もう帰る」と告げてゲームセンターを出た。でも家に帰る間に、ツラツラと考えると、どうも柳沢さんの言った事が正しい気がしてくる。

本当にあたしは、みいちゃんが居なくなった事を、悲しんでいるんだろうか？

でもそれを考えると、酷く怖い気持ちになるので、あえて考えない事にする。

とりあえず、みいちゃんの居ない日常は、なんだか物足りない気がした。

「柳沢さん、昨日はごめん」

翌日、あたしは思い切って柳沢さんに電話をかけた。

「いいよ。木村さん、ゲームとか興味無いのに、無理に誘って。こっちこそごめん」

「いいのいいの。それより、柳沢さん。あたし、みいちゃんを助けたいの」

「みいちゃんを？」

「柳沢さんだって、みいちゃんが居ないと寂しいでしょ？　ねえ、

一緒に探そうよ、みいちゃんをさ」

柳沢さんはしばらく黙っていたけど、その内ボソボソ言い出した。
「木村さんはみいちゃんの事、助けたいと思うのかもしれないけど、私は別に思わない。もう、終わった事だから。……でも、木村さんがどうしても、そうしたいなら……協力するよ」

「ほんと！　ありがとう！」

「でも、私、明日から里帰りで……そうだ、住谷君なら、『線』の事、詳しいと思うよ。彼に相談してみたら？」

柳沢さんはそう言うのと、上手くはぐらかしながら電話を切ってしまった。

あたしの頼りは住谷君だけ。よりもよって、住谷君だよ……。しばらく決心がつかなかったけど、結局自分ではどうしようもないので、住谷君に電話をかけてみた。

住谷君のお母さんらしき人が電話に出た。

「同じクラスの木村ですけど、裕一君はいらっしゃいますか」

と、尋ねると、お母さんは「はい、ちょっと待ってね」と答えて、受話器を離れたみたい。小さく、「裕一に女の子からの電話！　今日は赤飯かしら！」なんて言ってるのが聞こえる。

しばらくして出てきた住谷君に「あの、『線』の事で聞きたい事があるんだけど」と切り出したら、彼は

「良くぞ聞いてくれました！」

と高らかに、そしてその後、延々一時間、難しい事を喋り続けた。

「す、す、住谷君、住谷君！」

「うん？　何、木村さん」

「い、色々凄いつて事は良く判ったから。それで、今までに『線』から出て来た人って居るの？」

「いいや、居ないなあ」

「じゃあ、みいちゃんを助けるのって、無理かな」

「みいちゃんって？　……沢村さんの事か。羨ましいよなあー、『線』に吞まれるなんて。くうー、俺も一回あっちに行ってみてえー

！」

「いや、住谷君の気持ちは別に良くて！　みいちゃんは助けられるの！？」

いい加減イライラしながら尋ねると、住谷君は自信満々で言い切った。

「帰って来れるかどうかはともかく、『線』に入れる日と、場所は把握してる。どう、木村さん。一緒に入らない！？」

そしてあたしは、コイツは話にならねえ、とばかりに受話器を下ろした。

夜になって布団に潜っても、なんだかあたしは落ち着かない。

ぽっかり穴が開いてしまったようで、何か物足りない。それがすごく不安なんだけど。

不安ってのはどういう事だろう。

みいちゃんが居なくなってしまうって、悲しいんだろうか。だったら、それでいいじゃないか。

なのにあたしは、今すぐ布団を蹴り飛ばして走り出したくなるくらい、ただただ不安だった。

これはなんなんだろう。

この一〇数年間で一度も経験した事のない不安だった。

「住谷君、『線』に入れる条件が判るの？」

翌朝、あたしはもう一度住谷君に電話をかけた。

「うん。詳しい話をするの難しいから、電話では説明出来ないけど、次の『線』が出る場所は判ってる」

「じゃあ、その話、教えて。どうすればいい？」

「んー……うちに来る？　野上三丁目って判るかな。あそこに二四

時間営業じゃないコンビニが残ってるだろ」

「ああ、判る」

「じゃあ、そこに来てくれよ。一〇時頃でどうかな」

そんな話になったので、あたしはそのコンビニまで歩いて行った。

住谷君は、自他共に認めるヲタク君。それも『異次元ライン』ヲタク。今時あんまり居ない。

でもプロの学者も顔負けの、凄い知識なんだって。

まあ、政府は今でも予報が外れるぐらいのアホっぷりが治らないし。

だとしたら、次に『線』が通る場所が判るなんて。住谷君ったら凄すぎる。

騙されてるんじゃないか、と不安になるけど、もう頼る先は住谷君しか無い。

住谷君を信じるしか無かった。

「ここがうち。どうぞ、あがって」

「お邪魔します……」

コンビニで合流すると、そのまま家に招待された。

クリーム色の壁にオレンジの屋根の二階建て住宅。庭にはこれでもかってガーデニング。玄関先に無意味にドーベルマンの置物。団地の中で、住谷家は少し浮いていた。

住谷君の家って一体、と思いながらお邪魔する。廊下にはミニチュアダックスを抱えた、いかにも関西生まれって感じのおばちゃん、ニコニコ笑って立っていた。お母さんのようだ。

「うちの裕一が部屋に女の子。部屋に女の子！今日は祝賀パーティーね！」

とでも言いたそうな顔。とりあえず笑顔で応えて、二階にある住

谷君の部屋に入った。

彼の部屋は住谷家でも、最も破壊力がある。

『異次元ライン』ポスターに『異次元ライン』カレンダー。『異次元ライン』ぬいぐるみ「らいんくん」。マニアックすぎる。

普通ここは大人気の、みやびちゃんのグラビアポスターとかだろ
うが。その方があたしも安心するっての。とか思いながら部屋をさ
らに見渡す。

なんと部屋にはパソコンが五台。でかいの三つと、ノートパソコン二つ。
そこら中に広がる本はやたら難しそうな本か、あるいは例によって
『線』の本。

「超豪華版異次元ライン写真集」「今日から始める異次元ライン対
策」「異次元ラインの謎に迫る一〇〇の項目」ま、マニアックすぎ
る……。

でもこの異常な本を嘗め回し、布団の中にも引きずり込みそうな
住谷君が、唯一の味方なのだ。あたしは正直引いていたが、耐え忍
んだ。

住谷君は椅子に座ってしまった。あたしはどうすれば、と思っ
てると、「はい」とアウトドア用の簡易椅子をくれた。微妙。

「えーと、それで。なんだったっけ」

「だから、どうして住谷君は、次に『線』が来る所が判るの？」

「ああ、それね。それ」

住谷君は嬉しそうにノートパソコンを引っ張り出して、何かの画面を見
せてきた。それと、日本地図帳。

「この地図には全部の『線』が出た場所をマークしてあるんだ。と
りあえず見て」

「……てんでバラバラだね」

あっちに出てはこっちに出る。未だに出現場所も時間もランダム
だって言われてるから、当然といえば当然だった。

「そう。一見、何の法則も無いように見えるんだけど、俺はついに
その法則性を見つけたんだ！」

「へえ」

「……なんだ、つまらない反応だなあ」

「いや、また難しい話をされるのかと……」

「木村さんに話しても無駄だから、詳しい説明はしないよ」

それはそれでムツとしたけど、確かに難しい話は聞きたくない。

「……で、その法則性って？」

とりあえず尋ねると、住谷君は嬉しそうに。

「なんと、『線』は一つの世界を作ろうとしているみたいなんだ」と答えた。

「……」

「……あれ、何、反応無し？」

「いや、そういう話は良く聞くなあと、思って」
フィクションで。そう言う住谷君は大笑い。

「そりゃそうだよ。事実は小説よりも奇なりって、昔から言うけど、逆の関係だってあるのさ。なんだっけ……タイタニック号の沈没も、小説で予言されてたぐらいだし」

「そーなの？」

「確か、タイタンって名前の豪華客船が冬の海で沈む話。タイタニック号沈没より前に、その小説が発表されてたんだ。氷河にぶつかる事も、沈む時期も一緒だったはずだよ」

「へえー」

「という事で。現実ってのはあんまり意外性が無いもんさ。とにかく、『線』が世界……もっと小さく言うと、国や町を作ろうとしてるって事は判るんだ」

住谷君がパソコンをいじると、何かの表が出て来た。

「今まで取られたのは、殆ど男。それと、就業後のお店や、道路、山とか。全部合わせると、小さな町ぐらいなら出来る」

「へえ……ほんとだ」

「女の方は今まであまり取り込まれてない。一〇人前後だけど、病気の人のとか、結構歳の人、中には老人も含まれてて、若い女性は〇

だったんだ。でも今回、沢村さんが取られて、若い女性があっちに行った」

「そうだね」

「で、注目すべきは、人の後に取られる物。大体、人の後には、建築物や物が取られるんだ。中には病院を医者ごとつてのもあるけど、老人の後に薬局とか。これがどういう事かって言うところ……」

「……あっちに行った人にとって、必要な物が取られるって事？」

「そういう事。それで……ええと。今の所、最後に確認されたのは沢村さんと自転車、それと猫。だから次は、沢村さんが欲しがる物が消えると思う」

「……」

みいちゃんが欲しがる物って言われても、検討もつかないけど……。

首を傾げていると、住谷君は嬉しそうに言った。

「『線』は、ある一定の法則に従って現れる。次は、僕らの住んでるこの辺りに来ると思う。最初から物を狙う場合、大抵『線』は、深夜から未明にかけて通る。この地域の中で、深夜には閉店していて、沢村さんが欲しがりそうな、今まであっちに行っていない物っていうと？」

「あ！ コンビニだ！」

あたしは気付いて思わず大声で言った。コンビニなら何でも揃っているし。猫缶だって置いてあるはずだ。住谷君も大きく頷く。

「そう。普通のコンビニは二四時間営業。だから『線』は取りたくない。でもあそこは夜一〇時には閉まる、今時珍しいコンビニ。むしろコンビニと名乗る資格が無いようなところだから。狙うとしたらここを、時期的には明後日深夜！」

「どうして明後日？」

「沢村さんが消えて六日。どうもあちは少し時間軸がずれてるらしい。俺の作った関数では……」

「ああああ、明後日なのね、明後日！　じゃあ、明後日、コンビニ

の前に立ってればいいんだ！」

「……まあ、そういう事」

住谷君は少し不服そうな顔で言った。

「でもどうやって補導されずに、はべればいいのかな」

「そこそこ歳っぽい格好で立ってればいいんじゃないかな。もしあてが外れた時のために、サバイバルグッズを用意して行こう。うん、それがいい。まあ上手くしたら、一瞬であの世だよ、木村さん」

にこやかに言う住谷君が、正直不気味だった。

でも結局あたしにはその道しかないのだ。あたしはリュックサックにおかしやら磁石やら詰め込んで、その日の夜を迎えた。

友達の家泊まりに行くと言って、コンビニの前まで来ると、住谷君は小型ゲームを夢中でやってた。

「何してんの？」

「RPGだよ。あっちに行って暇だったら、コツコツクリアしようかなって」

「あっち、コンセントとかあんの？」

「大丈夫、この懐中電灯の取っ手を回すと、充電出来るんだ」

「あ、そー。便利ねー」

適当に相槌を打って、溜息を吐いた。ホントに住谷君って信用していいのかな。

第一、本当に『線』の中に世界があるわけ？ 誰も帰って来ないのに、大丈夫なわけ？

そんな事を考えながら、あたし達は待ち続けた。

「ところで、木村さんはそんなに沢村さんが好きだったの？」

「え？ そりゃそうよ、友達だし」

「ふーん」

「ふーんって。何その反応。なんか腑に落ちない事でもあるの？」

「いやね、木村さんは本当に、沢村さんが大事で探しに行こうとしてるのかなあと」

「なによ」

その言い方にあたしはムツとしたけど、次の言葉に驚いた。

「自分が寂しいだけじゃないのかなあー、と、思わなくも無い」

「そ、そりゃ、寂しいわよ。でも、それだけじゃなくて……」

「第一、もし俺の理論が正しければ、あっちから出る事も可能のはずなんだ。なのに、沢村さんは、木村さんが一生懸命探しているにも関わらず、出て来ない。……出て来ないんだよ、木村さん」

「な、何が言いたいのよっ！」

あたしが思わず叫んだ時、ソレは来た。

そこは確かに、町だった。

真っ黒な地面と風景と空に、街並みが張り付いたみたいなの。

意外な事に、衝撃も音も無く、あたし達はいつの間にか、こっちに来ていた。

「……」

「あれ？ どしたの、木村さん」

「いや、あの……普通、こう……衝撃とか、向かってくる『線』とか見えるのかなあー、と思ってたから……」

「ああ……それはよくある誤解だね。アニメとかの見すぎじゃない？ 光に関わる全ての現象は、目に見えた瞬間、俺達に届いているから、実際は「来るぞ」どころか「あ」を言うヒマも無いんだよ」

何せ見えるって事は光の粒子が云々、と熱く語り始めた住谷君を放置して、あたしは周りを見渡した。

後ろにはさっきと同じコンビニが普通にある。でも右隣には、見た事もない小さな「久谷診療所」とかいうのがあった。反対側には「ファッションセンターミナミ」とかいうの。さらに向こうには「

手芸の店 益田」。

「……なんか、昭和ねえ」

そう言ってみると、街灯がついてた。それで真っ暗なのに見えるんだ。

ふと遠くに、木造の小屋がたくさん建っているのを見つけて、あたしはそっちに行ってみる。

小さな小屋だった。ヘンゼルとグレーテル、お菓子無し版って感じの。

「うーん」

「わ！ いきなり側に来ないでよ！」

さっきまでブツブツ言ってたくせに、住谷君はいきなり後ろに來ていた。気配が無いタイプの人か。

「いや、これは面白いな……これ、最近作った物だよ」

「え？」

「切りたての木の匂いにするし。でもこんなのが取り込まれたのは知らない。こっちに來てから、誰かが建てたんじゃないかな」

「……完璧、永住する気満々なわけね」

「みたいだなあ」

そんな事を言いながら、とりあえず辺りを散策してみた。

街並みはまだまだ不完全で、所々空き地もあった。これからまた欲しくなったら取ってくるって事なんだろうか。

普通の一軒屋はあんまりない。「橘工務店」とか「電気の今田」

とか。田舎の潰れかけの店みたいなのがいっぱいあった。

「どうしてこういうのばかりなのかな」

「さあ。こういう空間では変に都会の店よりも、田舎の方が実用品が多いって事かもねえ」

しばらくうろたえてたけど、結局人は見当たらなかった。

「誰もいないね」

「そりゃそうだろう」

「どうしてそう言い切れるの？」

「だって、この世界はコンビニを要してたわけだから。今こっちの住民は皆でコンビニを開店させてる、と考えていいんじゃないか」

「あ、そっか」

で、あたし達は散策をやめて、元のコンビニまで戻る事にした。

そこで、とんでもないものを見た。

「……みいちゃん！」

コンビニの人だかりの中にその姿を見つけて、あたしは思わず叫んだ。なにせ、そのみいちゃんってば、あまりにも変わっていたから。

「あれえ、ふうちゃん」

につこり笑った彼女は、髪を真っ赤に染めている。しかも、ものすごく露出の高い服装。キャミにミニスカ。あの少女趣味なみいちゃんが。で、黒い仔猫を抱いてる。みいちゃんの左手には、封の切られた猫缶。仔猫はそれをムシヤムシヤ食べている。

そしてみいちゃん含め、全員が裸足だった。

皆Tシャツ一枚に半ズボンみたいな服装。髪も髭も伸ばした男の人が多くて、あたしはちよつと引いた。みいちゃんは全然その場に溶け込んで、正直怖い。

「ふうちゃんも来たのー？」

「来たって言うか……みいちゃんを助けに来たんだよ」

「えー、私を？」

「そうだよ！　こんなトコ出ようよ。住谷君も来たから、出かたぐらい判るからさ」

「……」

みいちゃんは困ったように笑った。あたしは何か、ものすごく嫌な予感がした。

「みいちゃん？」

答えを促すように尋ねたら、みいちゃんは言った。

「ごめん、ふうちゃん。私、ここに居たいんだ」

「な、なんで？ 帰ろうよ。あたし、みいちゃんが必要なのよ」

焦ってそう言うのと、みいちゃんは本当に困ったような顔で、でもあっさりと。

「でも私には、ふうちゃん、必要じゃないからさ」

そう、言った。

「まあ、落ち込むなよ。世の中に必要な人間なんて、殆ど居ないって」

住谷君のフォローは、はっきり言ってトドメ以外の何者でもなかった。

とりあえず、あたし達はこの世界に一生留まるつもりは無いので、出口を探しがてら、散策していた。

たくさんの男達が、忙しく働いていた。働くと言っても、サラリーマンなんか当然居ない。皆、畑を耕したり、木を切って家を建てたり。人によっては、服や料理も手がけている。

その全てが、アウトドア風っていうか。ずっと前にやってた、田舎暮らしのススメ、なTV番組を思い出すような感じ。

うちに来ていた郵便屋さんも居た。太いおじさんは自転車で、手紙の代わりに木材を運んでいる。いつもしよげた冴えない顔をしてたけど、今は少し楽しそうだった。

そして、知りたくないのに、みいちゃんがどうしてもこの世界に居たいと思うのか、その理由も知ってしまった。

みいちゃんは、この世界のアイドルなのだ。悪く言えば、風俗嬢。他に女の子の居ないこの世界で、みいちゃんは、天使だった。

「どうしてこうなっちゃったのかな。大体、ここに住んでる人達、どうして出ようとしなの？」

黒い街並みを歩きながら、住谷君に尋ねてみると、彼は携帯の電

波が繋がるのを確認しながら答えた。

「そりゃ、ここでは誰もが必要だからじゃない？」
ここってば、ユートピアなんだよ。

住谷君は、少し嬉しそうだった。

現代社会の一番の問題は、お金で何でも買える事だ、と住谷君は説明してくれた。

大人達は、あくせく働く。お金を動かす。貰ったお金で、物を買う。

物を買うって事が、仕事の目標になってる。それが全部を崩したんだって。

だから、誰もが皆、同じ一般教養の問題を解いて、似たような名刺を差し出し、家に帰ったらビール片手に、巨人だ阪神だって言う。それを見ると、子供はげんなり。何にも出来ない親父にウンザリ。学校に行けば自分も同じで、埋もれてる。こんなハズじゃないんだ、自分ってのがあるんだって、基本も無いのに個性を主張しちゃう。

最終的に「俺はこの世界に必要無いんだ！」って気付いて、鬱になって、引きこもりだのニートだの。

簡単に言えば、そういう事なんじゃないかな、と住谷君は言う。

「この世界には、お金で買える物が無いんだよ。ご飯は畑で作る。鶏を殺して肉を食べる。木を切って家を建てる。布を縫って服を設置る。全部自分でやらなきゃいけない」

「でもそれって、すごく不便じゃない」

「そう、不便なんだ。でも、ここに居れば、誰だって必要な人。この世界では、男は男ってだけで必要だ。そして女は女ってだけで、必要なんだ」

自分が必要だなんて、今の社会で感じられるかい、一瞬だって。住谷君の問いかけに、あたしは答える事が出来なかった。

のんびんだらり、と毎日を生きて、特に理由も無く、大学に行く。勉強の果てに、会社に入って、毎日毎日、隣の人と同じ仕事。同じ会話。

もっと給料上がればなあ、彼氏が欲しいなあ、デイオールの香水っていいわよね、ねえ海外旅行はどうかしら。

あたし達は、過去も未来もそう。何も無い。

だったら、ここでは？

あたしはみいちゃんの事を考えた。

みいちゃんは、ちょっと可愛いだけの、何の取り柄もない女の子。頭は良くないし、グズだし、トロくさいし、なんだか見てるだけでイライラする。でも友達だったら、こういう子も可愛いな、って思うだけ。

きっと、社会に出たら、とんでもない子になるんだろう。実際、あたしはみいちゃんと同じ仕事はしたくない。レポートの発表をするのも嫌だ。きっとギリギリまでのんびりしてるんだ。それって凄く、イライラする。

でもそういうの、みいちゃんも感じてたんだと思う。それをみいちゃんは「理不尽」と名付けてたんじゃないかな。一生懸命頑張ってるのに、グズだって言うの、酷い、とかって。

そんなみいちゃんと一緒に居れば、誰だってデキる女だった。あたしも、だからみいちゃんを彼女にしたところが、無いと言えば嘘になる。

だけど、ここではみいちゃんは、グズな子でも、バカな子でもない。

女なんだ。

あたしはそこで酷い寒気を覚えた。

そして、居ても立ってもいられず、住谷君を放ったらかしで、みいちゃんの所に走って行った。

「みいちゃん！」

探し当てたみいちゃんは、猫と、色黒な男の人と、仲良く遊んでいた。指を絡ませたりする遊びだ。その遊びが辿り着くところを想像して、あたしは眩暈がした。でも、卒倒してる場合じゃない。

「なあに、ふうちゃん。まだ居たの？」

みいちゃんは、少し嫌そうな顔であたしを見た。今までこんな顔したの、見た事無い。すごく悲しい。色んな事が。

「みいちゃん、帰ろう。こんなトコに居ちゃ、ダメだよ」

「どうして？ みいちゃん、帰りたくない」

「そうだよ、行かないでくれよう。僕達とここで楽しく暮らそう」横に座ってた色黒の男が、馴れ馴れしくみいちゃんに言う。あたしはその男をキッと睨んでから、みいちゃんを見た。

「みいちゃんは、『ここに居たい、ここに居れば、自分が必要』とか、思ってるんでしょ」

「そうだよ。ここに居たら、皆、みいちゃんの事、愛してくれるもん」

「みいちゃん、それ、気のせいなんだよ」

「嘘よ。ふうちゃんはここでモテないから、私の事、嫉妬してるんでしょ」

ああ、みいちゃんって、こんなに頭悪かったっけ？

「良く聞いて。ここに必要なのは、女なの。あんたじゃないの。あんたは今、ここで唯一の可愛い子だから、愛してもらえるんだよ。でもそれって、あんたの体の価値だよ？ もし明日にでも、もっと

美人でセクシーな、本気のお水さんが来ちゃったら、どうするの。
明日にはあんた、ポイだよ。それでいいの」

「僕はどんな子が来ても、みいちゃんがいいなあ」

色黒男はとことんうるさい。コイツ殺したるか、と本気で思ったのは初めてだ。

殺意ってのはホントにすごい。自分が内側から爆発しそうだったけど、それどころじゃなかった。

「判る？ 今、あんたは自分に価値が有ると、思い込んでるんだよ。でもあんたの価値は、本当は体にしか無いんだよ。あんたの体の価値なんて、あっちでもこっちでも変わんないよ。そんなので満足しているの？ 本当にそのぐらいで、自分を売っていいの？」

そしたら、みいちゃんは色黒男を放り出して、反論してきた。

「じゃあ、ふうちゃんは価値が有るの？ ふうちゃんだって、無いじゃない。『みいちゃんが必要な』、なんてここまで来て。私、知ってるんだから。ふうちゃんが私を利用してるって事ぐらい。頭悪いけど、判るんだから。ふうちゃんは、私が居なくなったのが悲しかったんじゃない。引き立て役が居なくなっちゃった、ふうちゃん自身が悲しかったんだよ。だからこんなとこまで来て、そんな偉そうな事言うんだよ」

ふうちゃんみたいな人に、偉そうに価値だの何だの、言われたくない。

あたしはその言葉が刺さるのを感じた。あたしはズタズタだった。自分でも見ようとしなかった物を、無理やり見せられた感じ。

確かにあたしも、薄っぺらな人間だ。あたしにだって、肉の価値しか無いんだろう。

でも、それでも、今だからやっと判っているんだ。

あたしは、それでも、それでも……沢村美奈が、好きなのだ。

もちろんそれは、今まで理解していたような、彼氏が出来ない代わりのモノとか、自分が優越感に浸れるいい道具としてじゃなくて、沢村美奈という女の子が、「ふうちゃん」と笑ってくれる彼女が、好きなのだ。

だから、あたしはこんなに一生懸命に、彼女を見ている。

初めて、正面から、彼女という人を見ているのだ。

「あんたの言ってる事、正しいよ。あたしも悪い。あたしも薄っぺらだし、あっちでもこっちでも、価値無いよ。むしろ、あんたより価値無いよ。でも、判ったの。価値って自分で作るしかないって。あんたもあたしも、まだ無価値だよ。でも、まだあたし達、何もしてないじゃない。だったら、これからまだ価値上がるかもしれないよ。下がるかもしれないけど、上がるかもしれない。だったら、まだ諦めなくていいじゃない。女って価値は、知らない間にどんどん無くなっていくんだよ。判るでしょ、美奈」

「……」

「だったら、もう少し頑張ってみようよ。あたしも頑張るよ、今度は偉そうなだけじゃ終わらない。もしそうだったら、あたしを叩いてでも前に進ませて。一緒に頑張ろうよ、美奈」

「……」

みいちゃんは、答えなかった。

「この先だね」

住谷君はあっさりと出口を見つけていた。あたしは少ししょんぼりして、その隣に立っている。

そこには、門があった。窓に近いかもしれない。ただそれだけだった。

でも、それはそのように見えるだけで、実際には開く必要も無く、すぐそこは、元の世界なんだって住谷君は言う。あたしには、とてもそうは見えない。

結局みいちゃんは返事をしなかった。あたしはやり切れなくなつて、「気が変わったら、一緒に帰ろう。しばらくは出口で待つから」と言い捨て、ここに来た。ちよつと泣いた。

でも、みいちゃんがどうするかは、彼女自身で決める事だから。どうなっても仕方ない。それはそれで、彼女が少しでも大人になるって事なんだろう。

三〇分待とうか、と住谷君は、例のゲームを取り出して、遊び始めた。門の近くに腰掛けて、キヨロキヨロしながら待ったけど、一向に来る様子が無い。

もう一〇分経ったかな、と時計を見たら、一分しか経ってなかった。こんなに長い三〇分、法事の時以来だ。

なんだか胃が痛くなりそうで、住谷君に声をかけてみる。

「住谷君は、ここに住もうって気にならないの？」

「ん？ 俺は、いいよ」

「どうして？ ここでは必要とされるんでしょ？ それって人間にとって、大事な事だったんじゃないの？」

「さあ。必要以上に必要とされるのも、考え物だろ？」

俺は、友達を助けたいから手伝ってくれ、って、その程度の必要でいいんだよ。

住谷君はそう言って、少し照れたように笑った。

なんだ、それは、もしかして、いや、それは、ううん？

住谷君のセリフについて深読みしていると、足音が聞こえた。見ると、みいちゃんが、仔猫を抱えて立っている。

「ふうちゃん」

みいちゃんがにっこり笑ったから、あたしも訳も判らず、笑い返した。

みいちゃんの笑みは、春の木漏れ日みたいに優しく、穏やかで。だから昔、あたしはみいちゃんに、「友達になろうよ」と声をかけたのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0662c/>

となりのみいちゃん

2010年10月8日15時30分発行